

## 「ことばの教室通級生」の投稿に学ぶ

1月26日付、さきがけの読者欄に、「障害者が過ごしやすい社会に」と題する投書が掲載されました。投稿者は照井貴久さんです。あきこまを支援する会にもかかわりのある方です。本人の了解を得ていますのでご紹介します。(新聞記事は縦書きですが、横書きで紹介します)

障害者が過ごしやすい社会  
に 照井貴久 46歳

(秋田市広面 会社員)

今、新型コロナウイルスの影響で、ほとんどの人がマスクをしている。しかし、マスクをしていると口元が見えず、声がこもってしまい、聴覚障害者である私には大変聞き取りにくい。

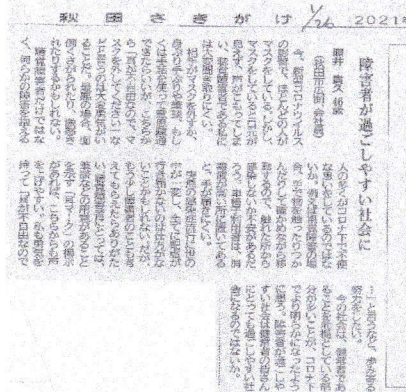
相手がマスクを外すか、身ぶり手ぶりや筆談、もしくは手話を使って意思疎通できたらいいが、こちらから「耳が不自由なので、マスクを外してください」などと言うのは大変勇気がいることだ。最悪の場合、面倒くさがられたり、激怒されたりするかもしれない。

聴覚障害者だけではなく、何らかの障害を抱える人の多くがコロナ下で不便な思いをしているのではないかな。例えば視覚障害の場合、手で物を触ったりつかんだりして確かめながら移動するので、触れた所から感染しないか不安があるだろう。車椅子利用者は、消毒液が高い所に置いてあると、手が届きにくい。

突然の感染症流行に世の中が一変し、全てに配慮が行き届かないのは仕方がないことかもしれない。だが、もう少し障害者のことも考えてもらえたらありがたい。聴覚障害者にとっては、筆談などの用意があることを示す「耳マーク」の掲示があれば、こちらからも声を上げやすい。私も勇気を

持って「耳が不自由なので…」と言うなど、歩み寄る努力をしたい。

今の社会は、健常者であることを前提としている部分が多いことだが、コロナ下でより明らかになったように思う。障害者が過ごしやすい社会は健常者の皆さんにとっても過ごしやすい社会になるのではないかな。



### 【編集子】

投書が掲載された頃、照井さんは自転車事故に遭って入院し、リハビリ中でした。病室の窓から「ことばの教室」のある学校が見えたそうで、当時の先生の名前を話してくれました。忘れずに心に残っている、ありがたいですね。

### 【編集子】

照井さんの姉さんも、あきこまの集いに何回か参加されていました。その当時のことを寄せていただいております。

“2016から2年間、特別支援難聴学級を担当しました。それまでは、普通学級の担任でしたので、重責を感じていました。そんな時にあきこまの会のお知らせをいただき、薫にもすすめる思いで参加しました。

会のメンバーは、教育関係の方から保護者、福祉関連、起業家の方と多彩な分野からの参加者で、会の参加を重ねるごとに自分自身の考えや仕事に対する姿勢に影響を受けたと思います。

現在は普通学級の担任に戻り、1年生を担当しています。単級なので忙しい毎日ですが、可愛い笑顔に支えられ、充実した日々を送っています。” 子どもたちも大きく成長したことでしょね。

## 三つの健康

あきこまを支援する会 高橋恒治

9月中旬、「本当の親じゃない」と言われたことに腹を立て、その場で義理の息子の首を絞めた事件がありました。32歳の若い父親です。からだは健康だったでしょう。でも、こころの健康、ことばの健康の点ではどうだったのか気になりました。

人間は道具・火・ことばを手に入れたことで工夫を重ね、厳しい自然の中でほかの動物とは違った社会を築いてきました。しかし、急速な発展と物質的豊かさの陰で多くのものを失っています。

### ■からだの健康

健康寿命は課題とされ情報があふれています。情報が多過ぎて選択に困ります。それ以上に問題は分かっている情報通りに実践できていない人が多いことです。

その代表が自動化。自動化により人間の手指、足腰が弱くなりました。機械力の便利さに必要以上に頼っています。手指、足腰を使わないのはからだの不健康です。食習慣についても塩分取り過ぎ、食べ過ぎなどが指摘されています。からだの不健康です。

がん検診が推奨されているように見えない部分に病気が隠れているほか、健康そうに見えますが五感に関係した悩みや困難を抱えていることも多く、今回の一般社団法人手話秋田普及センターさんの講演会企画は、聴覚障害、発達障害を取り上げことでとても意義ある研修となりました。

### ■こころの健康

昭和時代と違って物が豊富で他人の世話にならなくても生きていけます。人とふれあったり話し合ったりすることが少なくなり、他人の気持ちを推し量る力をはぐくむ場が減ってしまいました。たとえば携帯電話、スマートフォンの普及があります。使い方によってはとても便利ですが頼り過ぎるのは「過ぎたるは及ばざるが」です。使用を規制する動きも出てきました。

以前、やはり当センターさんの研修で人と接するとき「笑顔」と「笑声」が大切であると学んだことがあります。顔をつき合わせたコミュニケーションが不足し、相手を気遣って待つこと、ゆっくりとした時を過ごすことを忘れ、すぐのメール返信を期待したり、昼、夜の区別なく夢中になったりしています。これでは気持ちやからだは休まりませんしこころにも不健康が及びます。

### ■ことばの健康

日常生活ではやさしい日本語、伝わる日本語が大事です。私たちの多くは日本語、耳から学んだ音声言語を使いますが、伝わっているようで伝わっていないのが音声言語です。いじめもパワハラも何が原因かという、「言いたいことが伝わっていない、相手に意思を伝えようとしても聞き取っていない」ことにあり、伝える方法を



学ぶことが大切であるとも言われています。音声言語に頼り過ぎるのはことばの不健康です。伝わる方法として、音声言語にメリハリを付けるとか、視覚言語の手話が注目されてきました。手話は耳の不自由な人のためだけのものではなく、誰もがその背景と仕組みを学び、日常生活に活かす価値は大いにあります。

耳の不自由さは見えない障害なので、人とふれあわずにいると気づかれません。高齢者にも現れますのでみんなの問題です。

■不健康を少しでも解消する。健康になるために心構えを変えてみませんか。

**ポイントその1** 「あせ・くら・あき」をときどき唱えましょう

あせらない 焦らない、急がない、ゆっくり進む。自分のペースで。

くらべない 比べない。他人と比べることで焦りが生じます。まず自分に力を。

あきらめない 諦めない。失敗も次に活かす。ゴールは必ず来ます。出来るところまで、それがその人の実力。他と比較しないことです。

**ポイントその2** 人に凸や凹は当たり前と思いましょう。物でも。

人にはそれぞれ違いがあり、成長にしたがって凸凹（優劣）が出てきます。それに伴う悩みや困難は誰にでもやってきます。それを解決するために私たちは学び、明日（あした）を迎えます。これが「人が生きる」ということです。

私たちは周りと同じことを望み、みんなと同じだ（＝、イコール）とか、普通だといってと安心します。しかし、同じ、普通にも凸凹がありイコールということはありません。生きていく上で出てくる凸凹に気づき、関心を持って、うまく付き合っていけるとすれば、心身共に健康な証拠です。

**ポイントその3** 不自由・不便は成長の糧と思いましょう。

不便は発明の母、不自由は成長の糧と言います。秋田の将来にも成長発展の道が開けています。今から50年ほど前、秋田県ことばの教室担当教員研究会が誕生しました。ことばの教室経営の情報、参考となる文献がほとんどないときでした。後年研究会は秋田県聴覚・言語障害教育研究会（県聴言研）となり、創設時の山田芳男さんたち研究会員は、退職後も後輩を育てる意図で県聴言研OB会を作りました。山田さんはこの8月亡くなりました。86歳でした。情報・文献が少なかったからこそ身近な事例交換を大事にして後輩に伝えられました。先輩から後輩に伝えられた地元秋田で培った精神は決して消えるものではありません。

■あきこまを支援する会

県聴言研には発達障害の子どもが学ぶ教室（代表呼称「まなびの教室」）の担当者も仲間に入っています。聴言研OB会は名称を変えました。秋田の「あ」、きこえの教室の「き」、ことばの教室の「こ」、そしてまなびの教室の「ま」から採って「あきこまを支援する会」としました。一人の子どもと担当者がかかわり合う時間は数年と限られています。しかし、子どもとその保護者の関係、学びは長く続きます。ここでも「あせ・くら・あき」の精神で、当事者・保護者に有益な、新しい情報を学んでもらいたいと強く願っています。

## 十人一色（じゅうにんひといろ）

あきこまを支援する会 高橋 恒治

十人十色に対し十人一色は金太郎飴と同じ意味です。金太郎飴は、細長い棒状に作った飴で、口に入る大きさに切ると、どこを切っても金太郎の同じ顔が現れます。そこで、昔から教育の在り方を論じるとき、集団のなかで同じような考え方や行いを金太郎飴に例えられたものです。集落の中でもみんなと同じくすることがよいことで、違った行為に対しては村八分が起きました。



### 今も残る十人一色

金太郎飴の考えは、日本語（音声言語）もそうです。島国であったことに加え、他国との交流が遅れたことから、日本人が使う日本語（音声言語）以外にコミュニケーション手段があることには気づきませんでした。耳が不自由で手話が行われていても、極少数であるために知られることはなく、いわゆる「普通」ではないコミュニケーションでした。

保育や教育の場では普通が好まれます。一例を上げると、ことばの発達（発達心理学の研究）の場合、たくさんのデータから平均値が導き出され、2歳になると〇〇ができる、3歳ではこんな言葉が言えるようになるなどの情報が子育て本に書かれます。親は自分の子が十人一色の中に入っていることで安心します

同じ親から生まれても同じような発達をたどるとは考えられません。親が違い、育つ環境が違うために十人十色なのに、世間はそのようには（発達には凸凹があるとは）思わず、とにかく同じ年齢や学年の子と比較し、「普通でない」「障害がある」と考えます。障害を「障碍」「障がい」「しょうがい」とするという表記で解消できる問題ではなく、根本に流れる見えない部分に対する私たちの考えの狭さに大きな課題があるのです。

### 生きづらさも十人一色から

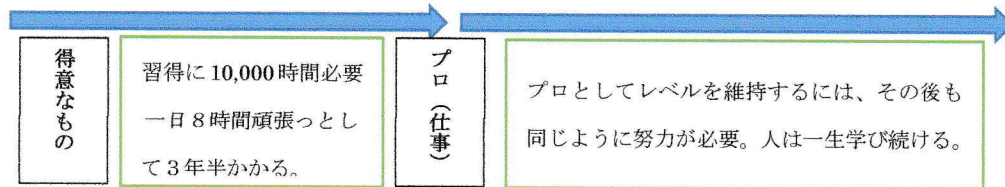
今思うと、筆者がいわゆる普通教育から、当時の「特殊教育」に方向転換したのも、校種、学年ごとに割り当てられた指導内容を実態に合わせることなく教えることや、受験科目でない教科を担当している虚しさを覚えたことにあります。年齢や学年ではなく、子どもの実態に合った指導が優先される特殊教育に魅力があったというのがその理由です。当時、特殊教育は大変ですね、とよく言われました。特殊教育は対象の子どもを年齢や学年が同じ周りの子のレベルまで引き上げることが目標ではなく、子どもの実態に合った成長を育むことにあるので、大変だとは思いませんでした。

特殊教育の名称が特別支援教育と言うようになって、ほぼ20年近くになります。指導としてソーシャルスキルが取り入れられます。生きていくのに必要な学びです。一般の学校で学ぶ、特に座学で学ぶ内容は、次に進む、上に進むための試験には役立ちますが、生きていくのにそれほど必要ではないだろうと思われるものが含まれています。このことに疑問を感じたり、興味を示さなかったりする子どもがいてもおかしくはありません。



## NHK 朝ドラ『エール』から

2020 年春に始まった NHK 朝ドラ『エール』。吃音の症状があり、不器用で運動不得意の主人公に、小学校の恩師は言いました。「人よりほんの少し努力するのがつらくなって、ほんの少し簡単にできること、それがお前の得意なものだ。それが見つかれば、しがみつくの。必ず道は開く」と。ドラマの主人公は、後に誰もが知るプロの作曲家になります。小さい時から、彼の頭の中に音楽がありました。



この図は、何事でも、1 万時間かけて取り組めばその道のプロ（仕事人）になれるということを示したものです。1 万時間は、一日 8 時間で 1 千 250 日を要し、毎日続けて 3 年半かかる計算になります。当然、一日にかける時間が少ないと、年数は多くなります。

生まれて、音声言語の習得する場合はどうでしょう。耳の聞こえる人には、特別努力しなくても音声言語（日本では日本語）が入ってきます。起きているときは、どこからともなく日本語が聞こえてきます。一日 8 時間は容易に確保できます。一方、耳の聞こえない人は日本語を自然には覚えられません。他のコミュニケーションの方法が必要だったのですが、十人一色が優先されていた学校は、学ぶ環境にはありませんでした。聞こえない耳を訓練することや他の方法で日本語を身に付けることに多くの時間が割り当てられました。

耳の不自由な人にとって「ほんの少し努力するのがつらくなって、ほんの少し簡単にできること」が手話であると認められておれば、「それがお前の得意なものだ。それが見つかれば、しがみつくの。必ず道は開く。」との教えがあれば、その生き方は違ったものになったのです。

## 足の大きさに合った靴を求めて

平成 27 年 4 月から令和 2 年 3 月まで、秋田市子ども未来センターの嘱託職員として週に一日だけ勤務し、幼稚園や保育園の子どもの相談を 5 年間経験しました。子どもと直接触れ合う機会はなく、ほとんどがおとな（職員や保護者）への対応でした。その話し合いの中で、それとなく心掛けたのは、「足の大きさに合った靴が必要である」という投げかけでした。もし、保育園や幼稚園が同じような受け入れ環境、すなわち同じ大きさの靴しか用意できなかったら、ぴったり合う子ども、あるいはそれに近い子どもは不自由なく活躍できるけれども、靴（保育や教育内容）が大き過ぎたり小さ過ぎたりしている子どもはうまく適応できません。そこで「同じ題材ではなく子どもに合った居場所に変える（環境を作る）ことに努めてください。」とアドバイスしました。

最近知った言葉・言い回しに「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる」があります。刑務所を出て社会復帰に苦しむ人々を扱ったテレビドキュメンタリーの中で、仕事先がなかなか見つからない現状に、指導・支援に当たる人が発した言葉です。こ

こでも受け入れる居場所の有無が人の指導・支援よりも重要な意味を持っていました。

### 居場所のひとつ「おんち・の・つどい」

あきこまを支援する会では、「あきた・きこえの教室・ことばの教室・まなびの教室（いわゆる発達障害）」に通う子どもの保護者を主に支援する目的でホームページを作ったり、あきこまの集いを開催したりしています。「つどう・つたえる・つながる」ことをモットーとして、集う、何かを提案してほしい、さらに他にも広げていってほしいという願いがあります。一方、3年ほど前から地域の高齢者の居場所として「おんち・の・つどい」も主催（これは月2回開催）しています。ここでは「手軽にできる運動」「みんなで歌うこと（カラオケ除外）」「（単体くユニット・モチーフから作る）折り紙」を中心に実施しています。おんちは漢字で音痴ですが、世の中にはいろいろなオンチがあります。（方向、機械、料理、パソコン等々）人は得意なものほかに何かしらのオンチの部分を持っています。あえてオンチを看板にして、「弱い部分に自信？を持って表現し、さらにその輪を広げていこう」。こんな居場所がおんち・の・つどいです。



### デジタル機は電気（電源）なければタダの箱

タイトルが「アナログ思考とデジタル思考」という本の中で、右脳と左脳の働きの違いを知ったのがデジタルとの出会いです。セットとしてアナログの言葉も知らされました。後年、ワープロ機が導入されたとき、操作がなかなかできず、手書きが速いこともあって「ワープロは時間潰しの新兵器だ」などとも言われたものでした。今やデジタル化は仕事の一部に不可欠のものとなりましたが、それに頼り過ぎる危険も多く、学習や仕事ではアナログの大事さも忘れてはならないと強く思います。

コミュニケーションには、音声言語、手話言語、手を使って書く書字言語のアナログの部分の恩恵を忘れてはいけません。デジタル機は電気なければタダの箱ですが、体に染み付いたアナログな音声言語、手話言語はいつでもどこでも役立ちます。手話言語は周囲の言語環境が豊かにならないと普及は進みません。先に述べた一日8時間、3年半では収まらない時間と努力が求められるので、覚悟が必要です。

9月末に開催された「見えない障害を考える講演会」では、電話リレーサービスと専門通訳の話がありました。手話通訳者の充実と前者はデジタル化推進、後者は生活言語から進んで学習言語・専門用語に精通することが課題でした。深い学びによって、プロのさらにプロを目指す。誰にでもできることではないが不可欠の課題だと知らされました。

デジタル化が叫ばれ十人一色になりそうです。しかし、忘れられ、見えなくなりそうなアナログ思考や技術の大事さを学び直し、手を使うことに自信を持って、自分の力量に応じて挑戦して行きましょう。



# 「障害」の表記「障碍」にならず

「障害」を「障碍」と表記できるよう当事者団体などが常用漢字にするよう求めていた「碍」について、文化審議会国語分科会の小委員会が26日、追加を見送るの見解をまとめた。3月の分科会を経て正式に決める。

小委員会では、常用漢字は公文書やメディアなどで使う際の目安で、社会での使用実態に基づき採用されてきたと説明。「追加を要するような使用頻度の高まりや使用状況の広がりはない」とした。今後も、使用実態などを継続的に調べる。

当事者団体などは、害虫や害菌などの用例から「障害者」は存在を否定する価値観を助長するとして要望してきたが、常用漢字表には社会問題の提起などのために漢字を選ぶ役割はなく、仏教に由来する「障碍」は辞書上、必ずしも良い意味ではないとも指摘した。

一方、「害」を受け入れたがたいと感じる人がいることを重く受け止め、寄り添いたい」と強調。障害者を示すのにふさわしい用語について、当事者を中心に議論するかどうかを含めて検討されることが望ましく、国語施策の観点から協力したいとした。

「碍」は2010年の常用漢字表改定でも候補になった。文化審議会は「使われる頻度や熟語が少ない」などとして追加せず、政府の障害者政策に関する会議の方針次第で再検討するとしていたが、同会議は結論を出していない。

東京五輪・パラリンピック

## 当事者団体など要望

## 「碍」常用漢字化見送りへ

### 「障害」表記への賛否の例

	賛成	反対
障害	現段階では適当	当事者の存在を害とす社会の価値観を助長
障がい	柔らかい印象があり、点字利用の人も書くことができる	「社会がカベを作っている」という意味がなくなる 日本語として不自然
障碍	「碍」はカベを意味し、社会でカベを形成していることを表すので望ましい	語源から「害」と同義等、それ以上問題視できない 負のイメージに変わりない

(政府会議で当事者や一般の人から提出された意見より)

### 常用漢字

法令や公用文書、新聞、放送など、一般の社会生活で使う目安となる漢字。1946年に告示された「当用漢字」(1850字、廃止を遂げ、81年に1945字を定めた。2010年に「常用漢字」2136字を追加、「あ」など5字を削除し、2136字になった。他の漢字の目安や基準は、戸籍に記載できる人名用漢字や、学校で学ぶ教育漢字などがある。

「しょうがい」の表記をめぐるの新聞報道です。

「障害」「障がい」「障碍」そして「しょうがい」。四つの表記があります。日本語は漢字を使うことで細やかな内容の違いを表せる優れた言語です。漢字使用の三つにそれぞれの思いがあり、なるほどと思わされます。

当事者団体の求めで検討してきていますが、人に対して使う場合は、表記の違いよりも、「しょうがい」と表記することのその意味にきちんとした考えを持つことが大事です。

今、「秋田美人」も話題になっています。字面から「美」=「容姿」だけに注目されがちですが、そうではなくその他の要素が備わっていることが求められます。一番目が健康、二番目が態度(ふるまい)、容姿は三番目です。見えない要素に目を向け、もっと大事にしたいものです。

## あとがき

令和2年度版「潭潭」。活動の中止が多い中でしたがこうしてその時々記録として残せました。 ◆扇田小・村松和子さんに近況を書いていただきました。特別支援教育との長い関わりから何を学び、これからどう取り組もうとしているかを知ることができました。寄稿に感謝です。 ◆見えない障害を考える講演会&冊子配布事業を企画された「一般社団法人 手話秋田普及センター」さんから執筆の機会を二度いただきました。現場を離れて15年以上になる身には、的外れな視点になることを心配しましたが、「県難聴児を持つ親の会」「見えない障害を考える講演会」「ぶどうの会(アインシュタイン親の会)」そして「あきこまの集い」を通して気づかされたことをもとにまとめることができました。企画に参加でき感謝です。(高橋恒治)